

アーサー・ランサム著 *Old Peter's Russian Tales* に基づく
宇野浩二のロシア昔話再話考
A Study of the Russian Folktales Retold by Koji UNO from
Arthur Ransome's *Old Peter's Russian Tales*

丸尾 美保
MARUO Miho

1. はじめに

ロシア昔話受容の歴史を振り返ると、明治期には1890年代から『家庭雑誌』などに数話が紹介されたのをはじめとして、児童向けにも『少年世界』などの児童雑誌に短い話が掲載された。巖谷小波の「世界お伽噺」「世界お伽文庫」シリーズには18話が紹介されている¹。大正期になると、『赤い鳥』や『金の星』などの雑誌での掲載が増え、単行本としても本格的に出版されている。ロシア文学者昇曙夢の『ろしあお伽集』（大倉書店、1918）や、アフナーシェフ『ロシア民話集』をほぼ網羅的に訳した中村白葉と米川正雄訳『世界童話大系 露西亜篇』一・二（世界童話大系刊行会、1924・25）が出版された一方で、鈴木三重吉の「世界童話集」シリーズに「ロシア」とする昔話が17話所収されるなど、ロシア語には直接縁のない作家もロシア昔話を再話している。

大正期の児童雑誌に紹介されたロシア昔話を調査したところ、他の作家に比して数が多かったのが、『赤い鳥』『金の星』『童話』などに童話として掲載された宇野浩二の再話であった。宇野の再話は、内容から原話がロシア昔話であることが推測されたが、原典は記されておらず、人物名などが日本化されているものも多かった。なお、本稿では「童話」は「児童（時には大人も含む）を対象とした短い話」、「再話」は翻案も含めて「原話を語り直しているもの」として用いる。

宇野がロシア昔話を基に再話したと推測する一連の童話の中で、最初に発表された「姉と弟の唄」（『金の星』1924.4-5）には、話の最後に「これは露西亜の片田舎の、冬になると明けても暮れても雪の降りつもつてある森の中の一軒家で、ピョトルといふお爺さんが、二人の小さい孫にせがまれて、毎日毎日、夜になると、雪の降りつもる音を聞きながら、話したお話の一つであります」と記されている。ピョトル（ロシア語で Пётр ピョートル、英語では Peter ピーターに当たる）おじいさんが二人の孫に語るという形式と話の内容から、アーサー・ランサム著 *Old Peter's Russian Tales*, 1916（邦訳『ピーターおじいさんの昔話』神宮輝夫訳、パピルス、1994）所収の "Alenoushka and her Brother"（神宮訳のタイトルは「アレヌーシュカとワヌーシュカ」。以後、邦訳タイトルは神宮訳を用いる）の再話であることが推定された。他の宇野の作品も検討したところ、同時期の『赤い鳥』などの雑誌にランサムのこの本から再話したと推測される作品が10話確認された。

宇野浩二（1891-1961）は、大正期から戦後まで活躍した人気文壇作家であり、童話作品も1作目の「揺籃の唄の思ひ出」（1916）以来、およそ200篇余りを残している²。宇野の再話に関しては、笠原美栄「宇野浩二の童話」（『立教大学日本文学』13号、1964.11）を先駆的な研究として、関口安義「宇野浩二の児童文学」（『信州白樺』36・37号、1980.4）や、中山際子「宇野浩二の童話一再話の方法一」（『東京工業大学人文論叢』15号、1990.2）、

増田周子「宇野浩二童話「王さまの歎き」にみるハインリッヒ・ハイネ「ロマンツェロ」受容」（『國文學』41号、関西大学、2007.3）などの先行研究があるが、どれも作品の原典を確定して比較したものではなかった。

本稿では、原典と対比することによって「ちょっとしたヒントから想像をふくらませ」「十分に咀嚼され、新たに生まれかわって子どもたちにまみえ」³たと関口が評価した宇野の再話の実際を検証したい。また、ランサムの再話に関しても原典を探して特徴を考察し、ランサムと宇野の文体や人物造形の類似について指摘する。このことから宇野の童話作法についても理解が深まると考える。また、宇野の再話は、ロシア昔話移入の面から見ても、本国以外で再話されたロシア昔話を底本にして、無国籍の童話として子どもたちに伝達されており、興味深いものであった。

2. ランサム著 *Old Peter's Russian Tales*

アーサー・ランサム（1884-1967）は『ツバメ号とアマゾン号』シリーズで名高いイギリスの作家である。ランサムは1913年に大英図書館でラルストンの*Russian Folk Tales*, 1873をたまたま手にして、「これこそ自分が書きたいと思っていた物語の素材になる」と思い、ロシア昔話を原語で読んで自身の言葉で語るためにロシアに入国した（その後ロシア革命に遭遇し、ジャーナリストとしても活躍した）。ランサムは短期間でロシア語を自学自習し、書店でロシア昔話を買集めて、「類話をみつけられるかぎりたくさん読み、それらを全部わきにおいて、自分で物語を書く方法」⁴で再話し、ロシア昔話集*Old Peter's Russian Tales*を書き上げた。1916年にロシア人画家ドミトリー・ミトローヒンの挿絵入りでイギリスのThomas Nelson社から出版されると、すぐに評判になり、今日では古典的な地位を獲得している。*Old Peter's Russian Tales*はランサムの代表シリーズである「『ツバメ号とアマゾン号』を凌駕する可能性がある」⁵との評価も見られる。

*Old Peter's Russian Tales*にはごく短い話も含めて20話が所収されている。再話した昔話の原話の出典を、ランサムはNote（前書き）に、通俗絵本、アフナーシェフの民話集、民俗学者の本と記している。収録されている昔話について調査したところ、20話のうち英雄叙事詩を基とする「サトコ」を除く19話のうち17話は、アフナーシェフ（1826-71）の*Народные русские сказки, 1855-63*『ロシア民話集』⁶の中に類話が見られた（資料①参照）。この17話について検証すると、ほぼアフナーシェフの文章通りに再話している話が多いが、アフナーシェフにはないモチーフが加わっているものも見られた（例：“Baba Yaga and the Little Girl with the Kind Heart”「バーバ・ヤーガと心のやさしい女の子の話」に小ねずみが登場する）。アフナーシェフに明確な類話が見当たらない2話「小さな雪むすめ」と「盗まれたカブと、魔法のテーブルクロスと、くしゃみする山羊と木の笛の話」は、複数の昔話を合成したような内容で、通常のロシア昔話とは雰囲気異なっている。特に「小さな雪むすめ」は、雪から生まれた主人公の心情が歌で表現され、情景描写も加わった叙情的な内容である。

アフナーシェフなどの昔話との比較により、ランサムの再話には、以下の三つの特徴が見られた。1. 枠物語になっており、語りかける文体で、時におじいさんと孫の会話が挿入される。枠の部分でロシアの風俗の説明がされている。2. 昔話に脚色が加えられており、本文中にロシア的背景の説明や、登場人物の感情の解説が入っている。3. 選ば

れた昔話は、由来譚、動物譚、魔法昔話、世態話とバランスよく構成されている。

ランサムロシア昔話の最大の特徴は、語りの文体とおじいさんが語るという枠物語の構成に見られる。ランサムは、「イギリスの小さなきき手たちは、ロシアのきき手と語り手がよく知っている世界のことをなにも知っていなかった。ひんぱんな説明をつけたら、たえまなくつづく独白とおなじように、話をだいなしにしてしまったと思う」⁷として、語り手としてロシアの森に住むピーターおじいさんを登場させた。ランサムの工夫によって、読者は語りかけられている孫の立場にたって、冬から春へと移り変わる中で展開されるロシアの田舎の異国情緒あふれる暮らしを実際に体験している気分で、昔話に親しむことが可能となった。ランサムが実際に見聞して内容に織り込んだロシア農民の牧歌的な暮らしは、実はロシア革命直前の、まもなく喪失してしまうことになる生活であり、「村での命名式の記録など、そのこと自体記録する価値がある」⁸との評価もなされている。

3. 宇野浩二による再話

宇野が1924年4月から翌年9月まで4誌に発表した10話の内容を比較したところ、全て*Old Peter's Russian Tales*に原話を確認された。それぞれのタイトル、掲載誌、対応するランサムのタイトルは、資料②にまとめた。宇野はランサムの20話のうちの半分を再話したことになる。発表した雑誌は、『赤い鳥』が6話、『金の星』が2話、『童話』が1話、『キング』が1話⁹である。1年半の間に種々の雑誌に発表されていることは、当時の宇野の童話作家としての人気を物語っている。

最初の「姉と弟の唄」の末尾に、ロシアでピョートルおじいさんが二人の孫に語った話であると解説しているが、ランサムの*Old Peter's Russian Tales*からの再話であることは記されていない。宇野は最初の「姉と弟の唄」以外は、出てくる事物や人物名を日本化して再話している。挿絵を見ると、「姉と弟の唄」、「塔の上の畑」、「鳳凰の羽」は西洋風の風俗で描かれており、「頼助の物語」は和洋折衷的な再話と併せて挿絵もどちらともとれる図像、他は日本の話として日本風俗で描かれている。当時は、外国種の物語を作家が日本化して再話することが珍しくなかったため、読者も再話であることを了解していたものと想像される。ただ、その後、種々出版された宇野の童話集には「聞いたがり屋」「雪だるま」「不仕合わせの神様」等が何度も収録されているが、時代が下がっても挿絵は日本の風俗で描かれており、原話のある再話であったとしても宇野の童話であるという認識で扱われているものと推測する。

宇野のランサム再話は、*Old Peter's Russian Tales*の掲載順にこだわらずに行われている。『赤い鳥』では、「頼助の物語」(1924.8)がランサムからの再話の最初であったが、宇野が前回掲載した「ちゅう助の手柄」(1924.4、ランサムとは無関係)が砂糖の話だったため、今度は塩の話をするという理由づけをして掲載されている。その後、「砂糖にだつて、鹽にだつて、あんな面白い話があるのです。まして、金魚にない譚がありません」との前置きを付けて、「不思議な金魚」(1924.9)が登場した。その後は掲載月にちなみ、翌年の2月に「雪だるま」、4月に猟師の話である「聞いたがり屋」、5・6月に葱を植えるエピソードが出てくる「塔の上の畑」、9月に鬼婆に茸をもらいに行かされる「優しい娘の話」が掲載されている。(原典では、「塔の上の畑」は葱ではなく蕪であり、「優しい娘の話」は茸ではなく針と糸を借りに行く。宇野あるいは編者の鈴木三重吉が季節を考慮

して変更したのではないかと推測する。)『金の星』には、宇野の改変がかなり入った「姉と弟の唄」と、原典通りの「森の頭になる話」が提供され、『童話』には、猟師と姫の結婚が成就する魔法物語「鳳凰の羽」、『キング』には欲張りな兄と貧しい弟の世態譚「不仕合せの神様」が掲載されている。

宇野の再話の特徴を考察するために、宇野の童話を集めて出版した童話集への収録回数の多い「聞きたがり屋」(12回)と「雪だるま」(13回)について、ランサムの原典と比較して分析した¹⁰。宇野自身によって最も多く童話集に採択された話は「聞きたがり屋」で、童話集のタイトルにもなっている(『聞きたがり屋 宇野浩二自選童話集』時代社、1941)。一方最も収録回数が多い「雪だるま」は、特に戦後に編集者が編んだ童話集に収録されている。

4. 「聞きたがり屋」(『赤い鳥』1925.4)の再話を考える

原話であるランサムの"The Hunter and his Wife"「狩人とその妻の話」は、アフナーシェフの『ロシア民話集』248番"Охотник и его жена" (狩人とその妻)をほぼ忠実に再話したものであった。ランサムが変更したのは、前後にピーターおじいさんと孫との会話を挿入した以外は、冒頭に猟師の妻が犬嫌いであったことを加筆、火の中から蛇を助け出す道具を棒から鉄砲に変更、などの数箇所すぎない。

宇野は、タイトルを「聞きたがり屋」に変更している。梗概は以下の通りである。おじいさんは猟師で、おばあさんはなんでも聞きたがる性分だった。おじいさんは2匹の犬を連れて山に行くが、獲物はなかった。山奥で薪の山が燃えており、火の中の大きな蛇が助けてほしいと言った。蛇はおじいさんが助けてくれたお返しに、獣や鳥の言葉がわかるようにしてくれたが、そのことを喋ると死んでしまうという。その夜は野宿したが、犬のうちの1匹が家に泥棒の番をしに帰った。翌朝、おじいさんは、戻ってきた犬がおばあさんに黒焦げの御飯をもらい、火箸で殴られたと言っているのを聞いた。家に帰って、このことをおばあさんに言うと、なぜわかったのかとあまりにしつこく聞くので、耐えかねたおじいさんは死ぬ覚悟をして話そうとすると、オンドリが「おじいさんはおばあさん一人も扱えない」とそしる言葉を聞いた。自分の弱腰に気づいたおじいさんがおばあさんを薪でさんざんひっぱたいたので、おばあさんは「今後はけっして無理に聞かない」と謝った。

宇野の再話をランサムの原文と比較したところ、次の特徴が見られた。

1. ストーリーの変更はされていない

2. 杵物語の解体

ピーターおじいさんがうるさく聞きたがる孫たちに、教訓として聞かせたという杵物語を解体して昔話のみを再話し、孫の感想も削除した。

3. 無国籍だが、登場する物品は日本化

原典の黒焦げのパンを宇野は「お釜の底の黒焦げの、かち／＼の御飯」とした。死を覚悟したおじいさんの死に支度については、ランサムではイコンの下ベンチに白いシャツを着て横たわるところを、宇野は、帷子の白装束に着替えて三宝を据えて「丁度切腹する人がするやうな用意」をすとした。

4. 内容の改変

壮年の狩人とその妻を、宇野は日本の昔話風におじいさんとおばあさんとした。蛇を

火の中から助け出す場面で、ランサムは、狩人が火の中にいる蛇に獣の言葉が分かるようにしてやるという条件を提示されて蛇を助けたが、宇野は、蛇が火の中で「苦しさに首を空の方に延ばしてゐます」と状況の深刻さを加筆し、「お前さんのその鐵砲を一挺捨てる気で、火の中をわたしてくれたらいゝんだよ」という犠牲を払って、獣や鳥の言葉がわかるようになったと改変した。これにより、おじいさんがより善良な性格であるように表現された。

5. 宇野の加筆

ランサムの原典は 9 頁という短篇であるが、宇野はあちこちに加筆して膨らませた。まず、最初に後で重要な役目を果たす鶏を飼っていることを提示して、ストーリーに整合性をつけた。また、聞きたがり屋であるおばあさんが日ごろどんなことを聞いたかを加筆し、おばあさんのうるささを具体化した。(原典：ひっきりなしにあれこれ聞く → 宇野：「おぢいさん、どうして鶏といふものは朝になるときまつて鳴くんだらう？」／「どうして朝と晝といふものがあるんだらう、おぢいさん？」／「どういふわけで、おぢいさん、お前さんは毎日毎日、朝早くから夜遅くまで獵に出るの？ よその人のやうに一日おきに出かけたり、三日目に休んだり、といふ風にしないの？」／「おぢいさん、お前さんはどうして獵師になつたの、どういふ譯で外の仕事をしなかつたの？」)

おかみさんが犬嫌いという場面を強調し、おばあさんの性格をより残酷にした。(原典：いつも泥だらけの足で家を汚すと文句をいっていた → 宇野：「犬が泥まみれの足をして、畳の上などに上つて来ますと、おばあさんは憎らしがつて、箒とか、心張棒とか、手当たり次第のもので叩きつけました。)」

おばあさんが犬のことが分かった理由を尋ねる場面では、宇野はおばあさんのねだる姿を加筆して、よりリアルに描写している。(「そして、おばあさんはおぢいさんの手をとつて、赤ん坊のやうに揺すりながら催促しました。)」

おじいさんがおばあさんを殴る最終場面では、詳しい描写を書き加えた。(原典：He jumped up from the bench, and took his whip and gave his wife such a beating that she never asked him another question to this day. 「ベンチからとびおきると、むちをとつて、おかみさんをさんざんひっぱたいたので、それっきり、おかみさんは、今日までなにもきかなくなった。」→ 宇野：「そこで、いきなり立ち上つて、前においてあつた、花をたてた三寶を蹴飛ばして、帷子の片袖を脱ぐなり、庭から薪を一本持つて来て、いきなりおばあさんを殴りつけました。／「お前のおかげで、俺はもう少しのところで命を落すところだつた。」とおぢいさんはおばあさんを殴りつけながらいひました。「それといふのも、お前が何でも物を問ひたがる癖があるからだ。この世の中にはいつてよいことゝ、悪いことがある。いつてよいことなら、聞かれなくてもこつちから話してやる。が、いけないことはどうしてもいへないのだ。さあどうだこれでも、今までのやうに根堀り葉堀り聞くか。」／さういつて、おぢいさんは尚止めずにおばあさんを殴りましたので、おばあさんもとう／＼閉口して「これからは決して無理なことを聞きませんから、どうか堪忍して下さい。」とあやまりました。)」

ストーリーの結末部分では、ランサムの原典にない「しかし、その後は、おぢいさんとおばあさんと、二匹の犬の一族は、大變平和に暮らしたといふ話です」と加筆した。以上から宇野再話の特徴を考察すると、「正直じいさん・ごうつくばあさん」の性格が強

められており、聞きたがりで困った性格のおばあさんの人物像が言葉やしぐさから浮かび上がってくる。おばあさんは、昔話の登場人物を超えて現実味を帯びている。「苦の世界」に代表される私小説的な性格の強い宇野の小説に登場する女性は、ヒステリーだった最初の恋人をはじめとして宇野をさんざんに悩ませる。宇野の小説特有の女性像がこのおばあさんに投影されていると感じられる。この話を執筆した大正 13 年は、女性関係が宇野の生活を圧迫してきており、昭和 2 年から宇野は精神を病んで入院した。「大変平和に暮らした」という結末部分の加筆に、宇野の心情がうかがえると感じるの行き過ぎだろうか。

5. 「雪だるま」(『赤い鳥』1925.2) の再話を考える

ランサムの"The Little Daughter of the Snow"「小さな雪むすめ」は、よく知られているロシアの昔話「雪娘」が元になっていると思われる。「雪娘」は、おじいさんとおばあさんが雪で作った女の子の像が動き出し、かわいがられて美しく賢い娘に育つが、夏に焚き火を飛び越して湯気になって消えてしまう話である。Andrew Lang著*The Pink Fairy Book* (1897) に"Snowflake"として掲載されており、英語圏でも早くから知られていた。日本にも明治期からロシア昔話として移入され¹¹、三重吉も「世界童話集」で再話している¹²。アフナーシェフ『ロシア民話集』34番"Снегурushka и лиса"「雪娘と狐」は、雪から生まれたという不思議な誕生と消えてしまうモチーフはなく、森でひとりになった雪娘が狐の背中に乗って帰ってくる話である。

ランサムの「小さな雪むすめ」は、Lang の"Snowflake"と同様に不思議な誕生をした雪むすめが、アフナーシェフと同様に狐に乗って帰ってくるという、2話を合成したようなストーリーである。しかし、昼も夜も冷たい雪の中で遊び暮らすことや、狐のエピソードのあとに自分から消えてしまう展開は、Lang の"Snowflake"ともアフナーシェフの「雪娘と狐」とも異なっている。

宇野の「雪だるま」の梗概は以下の通りである。おじいさんとおばあさんが作った雪だるまが、手足をはやして男の子になった。雪だるまは、冬中、夜はおじいさんの庭でひとりで踊り、昼は外で子どもたちと遊んで過ごした。ある日、他の子どもたちと森へ遊びに行き、森の奥に取り残された。木に登っていると、熊と狼が家に送ってくれると言うがそれぞれやり過ごし、狐の背に乗って帰って来た。狐がお礼として鶏を欲しがったが、お婆さんが惜しんで犬をけしかけたため、雪だるまは自分より鶏を惜しんだと歌い、水になって消えて、雲の向こうのお母さんの家へ帰った。

宇野浩二再話の「雪だるま」とランサムの「小さな雪むすめ」との相違点は以下の通りである。

1. ストーリー、細部の叙情的な描写などは、ほぼ原典と同じ。

宇野は章立てを行い、4章に分けた。原書は小さなカット1箇所を含めて14頁であるが、宇野は挿絵が多く入って12頁とした。

2. 枠物語の解体

ランサムの原典では、前に雪解けの景色の描写、途中で孫が口を挟む場面が2箇所あり、最後も孫と会話して終わるが、宇野は物語のみを再話。

3. 日本化

ランサムのロシアらしい風俗を、宇野は北国の山の中の話とした。雪だるま(雪むす

め)の服装も原典では毛皮の帽子と長靴の洋装であるが、宇野は、赤い着物と赤い紐のついた藁靴に変更した。冒頭で、ランサムの雪むすめは抱き上げられて家に入るが、雪だるまは外した雨戸にのせて家に連れ帰られた。狐に与えたご馳走はパンから油揚げに変更、雪だるま(雪むすめ)が溶ける場所はかまどの前から囲炉裏の側とした。

4. 宇野の改変

宇野は、主人公の性別と性格を変更した。原典では雪で作った女の子が、声をかけると動き始めるのだが、宇野は、お爺さんとお婆さんが作った雪だるまに声をかけると、両肩と両股から手足が生えて動き出して男の子の「雪だるま」になった。ランサムの雪むすめは、"like a little white spirit"「まるで白い小さな精霊」のように風を巻き起こして踊るのだが、宇野の雪だるまは、おじいさんとおばあさんが手拍子をとるような愉快的な踊りを踊る。

また、宇野は、おばあさんの性格をより実際的で賢くした。宇野のおばあさんは、雪の像が動くことに対して「まさかね。しかし、そんなことはあてにしないでいいから、こしらへて見ませう」と現実的である。狐に鶏をほうびにやると言いながら欺く場面でも、おじいさんが言われたとおりに渡そうとするが、おばあさんが知恵をつけたので犬をけしかけたとして、「正直じいさん・ごうつくばあさん」の構図をはっきりさせた。

5. 昔話の童話化

物語の冒頭は、ランサムの原典では"There were once an old man, as old as I am,..."と昔話らしい始まり方なのに対して、宇野は「このお爺さんとお婆さんが住んでみた村といふのは、大きな森のはづれにありました」と、童話風にはじめている。また、話の締めくくりの文章も原典は"... and some day, you know, when you are making a snow woman you may find the little daughter of the Snow standing there instead."

「..だからな、いつか雪だるまをつくっていたら、それがいつのまにか雪むすめになっていった、なんてことがあるかもしれない」と孫たちに話すのを、宇野は「その星は夏の間はずつと遠い、地平の傍の方で光って見えますが、冬になると我々の空の上に帰って来て、ぎら／＼と輝いてゐます」と幻想的に結んでいる。

以下、ランサムの「小さな雪むすめ」と併せて宇野の「雪だるま」について考察する。ランサムの雪むすめの描写の中に、snowflake という単語が出てくるため、恐らく Lang の *The Pink Fairy Book* 所収の "Snowflake" も参照したと考えるが、雪むすめの精霊のような性格や夜に外で踊り狂う様子などは "Snowflake" には書かれておらず、ランサム独自のものと推測する。狐とのモチーフの大部分はアフナーシェフの民話集の「雪娘と狐」と同様だが、狐を追い払って満足するアフナーシェフの結末に対して、雪娘がおじいさんとおばあさんを誹って消えるとしたのは、ランサムの創作であると考えられる。

また、「小さな雪むすめ」には昔話には珍しく叙情的な描写が含まれている。例えば、雪むすめが夜に踊る場面は、"And there she was, running about in the yard, chasing her shadow in the moonlight and throwing snowballs at the stars." と描かれている(渡辺訳には欠落)。宇野は「月夜のことでしたから、黒い影がくつきりと雪の上に映ってゐます。それを追っ駆けては踊ったり、さては雪を掴んで天の方に投げつけながら踊ったりしてみました」と省略せずに訳している。

笠原美栄は、「雪だるま」について、「浩二童話の全ての要素を備えている点で注目す

べきもの」¹³と評価し、渋川驍も「いかにも童話らしい好ましい作品」¹⁴としているのは、叙情性にあふれた描写と、小さな欲が不幸を招くことになるペーソスが心に響くからだと考えられる。「雪だるま」を高く評価する水上勉は、「雪だるま」には、宇野が子ども時代におばあさんと二人で暮らした大阪の寂しい暮らしの記憶が込められていて、暗くてペーソスあふれた諧謔味があると記している¹⁵。

宇野の「雪だるま」とランサムの「小さな雪むすめ」とを比較すると、主人公が男の子に変更されて話のトーンが変わっているとはいえ、語り口も叙情性もランサムに起源があり、関口の言う「新たに生まれかわった」というほどの再創造とは言いがたい。しかし、原典を知らなければ、叙情性においてランサムと宇野は通い合うところがあるため、「夢と童心によって成立している」¹⁶宇野童話として違和感がなく、高評を得たものと考えられる。

6. 宇野再話の特徴

以上の2話をふくめた宇野のランサムからの再話10話の分析から、宇野の再話には以下の特徴があった。

1. 再創造というような極端な改変はされておらず、ストーリーを踏襲

戦後宇野は、「聞きたがり屋」が所収されている『宇野浩二童話名作選』（羽田書店、1947）「あとがき」に、「・・・本からよんだものを、もとにししたり、人から聞いた話を、もとにししたり、して、書きました。この、さまざまの話は、みな、私の考へて、作りなほしたものでありますから、けつきよく、どの話も、私が、作ったことになるのであります」と書いている。しかし、所収されている「聞きたがり屋」は、漢字をひらがなにし、句点を多数入れ、接続詞や語尾をわずかに変えるという程度の変更はあっても、ほぼ『赤い鳥』に掲載されたものと同じであった。先に分析したように、細部の加筆はあったがランサムの原典通りであり、「私が作った」と言えるかは疑問である。

「雪だるま」は、宇野が戦前にかなりはしょって再・再話したものが存在しており（『新イソップ物語』中央公論社、1939）、戦後にもその形で童話集に収録されたものも見られる（『話を買う話』光文社、1947）。しかし、戦後に編集者が選んで何度も童話集に収録したのは、『赤い鳥』に掲載された形であった。先に検討したように、雪娘を雪だるまに変えてはいるが、ストーリーや叙情的な描写はランサムを踏襲したものであり、これも「私が作った」といえるのか、疑問が残る。

2. 恋愛を避けて、おじいさんとおばあさんの話を選択

① 結婚する結末を持つ魔法昔話は少ない

Old Peter's Russian Tales の20話には結婚に至る魔法昔話が8話あるが、宇野が再話したのは3話にすぎない（「姉と弟の唄」「頓助の物語」「鳳凰の羽」）。しかも、「姉と弟の唄」では、姉が助けてくれた商人と結婚するエピソードは省略されており、他の2話も愛情表現は薄められている。

② 「正直じいさん・ごうつくばあさん」を強調

Old Peter's Russian Tales では、4話におじいさんとおばあさんが登場している（「バーバ・ヤーガと心のやさしい女の子の話」「小さな雪むすめ」「盗まれたカブと、魔法のテーブルクロスと、くしゃみする山羊と木の笛の話」「金の魚」）。宇野はその全てを再話し、さらに「聞きたがり屋」では、狩人とその妻をおじいさんとおばあさんに変

更した。また、「聞きたがり屋」も「雪だるま」もおばあさんがより意地悪で性格が悪いように加筆されている一方、おじいさんは善良さを強調された。宇野の小説には、主人公を困らせる女性がたびたび登場するが、宇野が再話した童話のおばあさんにも細部に存在感がある。結末もおばあさんがおじいさんに謝罪したり（「聞きたがり屋」）、酷くおじいさんをいじめていたおばあさんが、貧しくなつてにっこり笑って迎えてくれる（「不思議な金魚」）などを加筆している。おばあさんが改心してハッピーエンドになるのが特徴である。

3. 昔話の童話化・語り聞かせる文体

ランサムの再話のうちアフナーシェフに原話が認められる話を検討すると、ランサムはピーターおじいさんが語ったという枠を使って、昔話の形態を維持している。宇野は昔話の枠を外し、おばあさんに個性を加筆するなど個人的な思い入れを加えて、ユーモアとペースをあふれる「童話」とした。

ランサムは、おじいさんが孫に語って聞かせる文体で昔話を書いた。ロシア的な風俗を説明するために入れた枝葉も多いため、単純化を特徴とする昔話の特性はやや失われている。宇野はもともと「独特の饒舌体の文体」¹⁷、「口で喋るように物語り、説き聞かすふうな」¹⁸文体を特徴としており、ランサムの文体と共通するところがある。宇野童話と認識されている一因に、ふたりの文体の類似性もあると考える。

4. 中途半端な日本化による無国籍童話化

宇野がロシアの話と注釈した「姉と弟の唄」は西洋風ではあるが、特にロシアらしさは認められない。ロシアのやまんばとも言えるババヤガーが登場する「優しい娘の話」（ランサム「バーバ・ヤーガと心のやさしい女の子の話」）は、握り飯などへの日本化がされているが、原典の bread パンをピロシキを思わせる「揚げ饅頭」に書き換え、ババヤガーの属性である臼にのって杵で漕いで、箒で跡を消すことはそのまま残すなど、中途半端な日本化であった。

ランサムがロシア的な背景をイギリスの子どもたちに伝えることに工夫を凝らしたのに対して、宇野は多くの話を日本化して自分の童話として発表した。日本化された西洋種の童話に慣れていた当時の読者は、どこの国の話であるかは拘泥せずに無国籍な童話として受け取ったものと推測する。

5. おわりに

これまでの考察から、宇野にとってランサムの *Old Peter's Russian Tales* は、まとめて翻訳紹介する意図をもたず、雑誌に寄稿する童話の種であったであろうと推測する。そのため、掲載誌の性格を考えて恋愛や結婚の話は避け、分量も依頼にあわせて短縮したり増量したりして、再話したものとする。語りかける口調も、叙情性や人情の機微に関しても、ランサムと波長があったためか、大きく改変することもなく、そのまま宇野童話として認められるものとなった。

ランサムを介した宇野の再話によるロシア昔話は、宇野の個性と合致した話（「聞きたがり屋」「雪だるま」「不仕合せの神様」）が戦後まで宇野童話として読みつがれた一方、本格的なロシア昔話の再話（「姉と弟の唄」「不思議な金魚」「鳳凰の羽」「優しい娘の話」）は、以後顧みられなかった¹⁹。故に、この時期に宇野によるランサムの *Old Peter's*

*Russian Tales*を通したロシア昔話の移入があったとはいいがたい²⁰。宇野の再話は、昔話と童話が未分化であった大正期の時代性も反映しており、ロシア昔話が多様な道筋で日本に入ってきた興味深い実例を証明するものであった。

- 1 拙稿「児童向けに刊行された明治期ロシア昔話—巖谷小波再話を中心に—」『昔話—研究と資料』85、日本昔話学会参照。なお、「世界お伽文庫」第42編『竈の神（西比利亜）』（1914）は、大正期に入ってから発行である。
- 2 増田周子「日本児童文学の作家と作品7 宇野浩二」『アプローチ児童文学』（翰林書房、2008）p.145。
- 3 関口安義は、宇野がランサムから再話した「不思議な金魚」「聞きたがり屋」を例に挙げている。「宇野浩二の児童文学」（『信州白樺』1980.4）pp.76-77。
- 4 ランサム『アーサー・ランサム自伝』神宮輝夫訳（白水社、1998）pp.209-216。
- 5 ヒュー・ブローガン『アーサー・ランサムの生涯』神宮輝夫訳（筑摩書房、1994）p.139。
- 6 A.N.アフナーシェフが1855～63年の間に、ウラジーミル・ダーリやロシア地理学協会の資料などを基に編纂し、8回に分けて刊行した。多くのヴァリエーションを含めて全部で600話以上が所収されている。
- 7 前掲『アーサー・ランサム自伝』p.216。
- 8 前掲『アーサー・ランサムの生涯』p.141。
- 9 『キング』は一般誌であるが、「(童話)不仕合せの神様」として掲載されている。なお、目次には、「(お伽噺)不仕合せの神様」と表示されている。
- 10 収録回数の多い順に並べると、「雪だるま」(13回)、「聞きたがり屋」(12回)、「不仕合せの神様」(8回)、「塔の上の畑」(3回)、他は1回ずつである（「優しい娘の話」は所収なし）。なお、「不思議な金魚」は、ランサムがプーシキン作「漁師と魚の物語」（金の魚）やロシア昔話「金の魚」から再話したThe Golden Fishを基にしていると推測したが、宇野にはよく似た話で、後に発表した「元のとほりになる話」（漁師の話）も存在する。「元のとほりになる話」は原典をプーシキンと宇野が明記しているため、別の話として扱った。
- 11 『少年世界』10巻3号に「雪娘」（栗原薫花著、1904.2.5）が掲載された。拙著「明治期「少年世界」にみるロシア—昔話および翻訳作品の考察—」（『梅花児童文学』9号、2001.7）pp.116-117。
- 12 文章の細部を比較したところ、三重吉はAndrew Langの*The Pink Fairy Book*, 1897に所収されている"Snowflake"からの再話したものと推測した。
- 13 笠原美栄「宇野浩二の童話」（『立教大学日本文学』13号、1964.11）p.86。笠原のいう「すべての要素」とは、文脈から、善悪の世界、作品に自己の断片を織り込むこと、ユーモアとペーソスであろうと推測する。
- 14 澁川驍『宇野浩二論』（中央公論社、1974）p.298。
- 15 水上勉「宇野浩二伝」（『水上勉全集』第16巻（中央公論社、1977）p.49。
- 16 関口安義「宇野浩二の児童文学」p.76。
- 17 増田周子『宇野浩二文学の書誌的研究』（和泉書院、2000）p.47。
- 18 与田準一「詩歌と童話を愛する無類の文学者宇野浩二」『新日本少年少女文学全集』21巻宇野浩二集（ポプラ社、1959）p.260。
- 19 宇野浩二編著『もとのとおりになる話—ロシア昔話』（大日本雄弁会講談社、1951）に*Old Peter's Russian Tales*の「もとのとおりになる話〔金の魚＝不思議な金魚〕」「とぶことのできるふね」「びんぼう神」が所収されているが、「もとのとおりになる話」はプーシキンと後書きに記しており、他の2話も*Old Peter's Russian Tales*からかどうかは不明である。昭和の初めに宇野は数年患って小説の書けない時期があり、復帰後の宇野の文体は饒舌体から枯れた文体に変わった。『もとのとおりになる話』に所収されている話は、新しい文体で書かれており、内容も単純化されているため、切り離して考えたい。
- 20 *Old Peter's Russian Tales*は、渋澤青花「二十銭童話文庫」シリーズ所収の「ロシア」と記されている「空を飛ぶ船」「塩」「雪娘」（1926年）の原典にもなると推測される。

資料①『ピーターおじいさんの昔話』所収の話と推測される原典

章の英文タイトル	神宮訳の章のタイトル (太字は昔話タイトル)	アフナーシェフ『ロシア民話集』の掲載番号とタイトル、邦訳タイトルは①中村喜和、②金本源之助、③米川正雄、④中村白葉	昔話のタイプ (便宜的)	宇野のタイトル
The Hut in the Forest	森の家 (昔話なし)			
The Tale of the Silver Saucer and the Transparent Apple	銀の小皿とすきとおったリンゴの話	569 [銀の小皿とうれたリンゴの話] (未見)	魔法 (結婚)	未見
Sadko	サトコ	アフナーシェフになし。ロシアの叙事詩「サトコ」	魔法 (結婚)	未見
Frost	真冬	95 「寒の太郎」①、「赤鼻のマロズ」②-別	魔法 (結婚)	未見
The Fool of the World and the Flying Ship	空とぶ船と世界一のお人よし	144 「空飛ぶ船」①、②-別	魔法 (結婚)	*
Baba Yaga/Baba Yaga and the Little Girl with the Kind Heart	バーバ・ヤーガ/バーバ・ヤーガと心のやさしい女の子の話	103 「ヤーガ婆さん」①、「バーバ・ヤーガ」②-別	魔法 (継母)	「優しい娘の話」(赤い鳥15-3)
The Cat who became Head-Forester	森番頭になった猫	40 「猫と狐」①	動物	「森の頭になる話」(金の星7-3・4)
Spring in the Forest	森の春(昔話なし)	なし		
The Little Daughter of the Snow	小さな雪むすめ	34 「雪姫と狐」②-1 (内容は異なる)	動物 (不思議な誕生)	「雪だるま」(赤い鳥14・2)
Prince Ivan, the Witch Baby, and the Little Sister of the Sun	イワン王子と、魔法の赤ん坊と、太陽の小さな妹の話	93 「魔法と太陽の妹」①、「魔法の妹と太陽のお姉さん」②-1	魔法 (不思議な誕生・結婚)	未見
The Stolen Turnips, the Magic Tablecloth, the Sneezing Goat, and the Wooden Whistle	盗まれたカブと、魔法のテーブルクロスと、くしゃみする山羊と木の笛の話	186 「魔法の馬とテーブル掛けと角笛」②-2、187 「袋から二人出よ」①と似ているか	魔法 (世態・爺婆)	「塔の上の畑」(赤い鳥14-6、15-1)
Little Master Misery	貧乏神	303 「貧乏神」③	世態	「(童話)不仕合せの神様」(キング1-9)
A Chapter of Fish	魚の章 (昔話のタイトル記載なし)	81 「歯の澤山あるかますの話」④	動物	未見
The Golden Fish	金の魚	75 [金の魚] (邦訳未見)	魔法 (世態・爺婆)	「不思議な金魚」(赤い鳥13-3・4)
Who lived in the Skull?	しゃれこうべの中に住んでいるのは	84 [蠅の御殿] (邦訳未見)	動物	未見
Alenoushka and her Brother	アレヌーシュカとワヌーシュカ	261 「姉アリューヌシカと弟イワヌシカ」①、「姉のアリューヌシカと弟のイワヌシカ」②-3	魔法 (結婚)	「姉と弟の唄」(金の星6-4・5)
The Fire-Bird, the Horse of Power, and the Princess Vasilissa	火の鳥と魔法の馬とワシリサ王女の話	169 「火の鳥とワシリサ姫」①、「火の鳥とワシリサ王女」②-別	魔法 (結婚)	「鳳凰の羽」(童話6-8・9)
The Hunter and his Wife	狩人とその妻の話	248 「猟師とその妻」②-3	魔法 (世態)	「聞いたがり屋」(赤い鳥14-4)
The Three Men of Power—Evening, Midnight, and Sunrise.	三人のつわもの——日暮れと真夜中と夜明け	140 「暁、夕べ、夜ふけ」①、「三つ子の三勇士、ゾーリカ、ヴェエチオルカ、ボルノーチカ」②-1	魔法 (結婚)	未見
Salt	塩	242 「塩」①、②-別	魔法 (結婚)	「頼助の物語」(赤い鳥13-2)
The Christening in the Village	村の洗礼式 (昔話のタイトル記載なし)	94 「ヴァズザ河とヴォルガ河」②-1、72 「鶴とアオサギ」②-別	動物	未見

- ・章の太字は昔話のタイトルと同じことを示す。
- ・アフナーシェフの『ロシア民話集』所収の話の邦訳タイトルは、中村喜和『ロシア民話集』(岩波文庫)と金本源之助『ロシアの民話』(1~3・別巻、群像社)を基とし、二人の邦訳がない場合は、中村白葉訳と米川正雄訳『世界童話大系 露西亞篇』1・2 (世界童話大系刊行会)で補った。
- ・*は『もとのとおりになる話』(大日本雄弁会講談社、1951)に改変されて所収あり

資料② Old Peter's Russian Talesを原典とする宇野再話作品(掲載順)

題	掲載誌・巻号	出版日	ランサム掲載順とタイトル(神宮による)
1 姉と弟の唄	『金の星』6巻4, 5号	1924. 4. 1, 5. 1	⑭アレヌーシュカとワヌーシュカ
2 頼助の物語	『赤い鳥』13巻2号	1924. 8. 1	⑯塩
3 不思議な金魚	『赤い鳥』13巻3, 4号	1924. 9. 1, 10. 1	⑰金の魚
4 雪だるま	『赤い鳥』14巻2号	1925. 2. 1	⑰小さな雪むすめ
5 森の頭になる話	『金の星』7巻3, 4号	1925. 3. 1, 4. 1	⑱森番頭になった猫
6 聞いたがり屋	『赤い鳥』14巻4号	1925. 4. 1	⑲狩人とその妻の話
7 塔の上の畑	『赤い鳥』14巻6号, 15巻1号	1925. 6. 1, 7. 1	⑳盗まれたカブと、魔法のテーブルクロスと、くしゃみする山羊と木の笛の話
8 鳳凰の羽	『童話』6巻8, 9号	1925. 8. 1, 9. 1	㉑火の鳥と魔法の馬とワシリサ王女の話
9 優しい娘の話	『赤い鳥』15巻3号	1925. 9. 1	㉒バーバ・ヤーガと心のやさしい女の子の話
10 (童話)不仕合せの神様	『キング』1巻9号	1925. 9. 1	㉓貧乏神